田部松声編『まつのはれ』

――得々庵中哉四十賀記念集――

伊藤善隆

はじめに

本稿では、田部（たなべ）松声編『まつのはれ（松の曠）』（得々庵中哉四十賀集、文政十年刊、個人蔵）を、翻刻紹介する。本書は、たたら製鉄の経営で有名な田部家当主の俳諧活動の一端を伝える資料である。

出雲国飯石郡吉田村（現、雲南市）の田部家は鎌倉時代から続く歴史を誇り、戦国時代あるいは近世初期から近代の大正中期まで、たたら製鉄を経営して全国有数の山林地主、耕地地主となった。相良英輔「田部家の由来とたたら製鉄業の展開」（『松江藩鉄師頭取田部家の研究』第一章、島根大学、平成21年3月）によれば、その資産は、昭和十二年時点で、山林が二万五〇〇〇町歩、田地が三七二町歩、畑地が九四町歩で、一〇二〇人の小作人を擁していたという。

一、序跋について

本書に序を寄せた多賀徐風庵は、美濃国池田六之井村の人。美濃派（再和派）の七世道統である古梁坊雨岡の子息で、自身もの九世道統（再和派）となった。通称を称六左衛門、文柳あるいは裏人と号し、天保三年三月二十四日に六十歳で没している。跋を記した田中五竹庵は、美濃国本巣郡芝原北方の人。美濃派の四世道統である五竹坊の孫で、十世道統（再和派）を継いだ。子琴あるいは文阿坊と号し、天保元年十二月十六日に五十四歳で没している。

美濃派は、四世五竹坊が、安永年中に門人の安田以哉坊と確執を生じ、五世以降は以哉坊の以哉派（雪炊派）と五竹坊の後継者河村再和坊の再和派の二派に分かれた。

古梁坊雨岡は『桜の首途』（享和三年〈一八〇三〉）の旅の際に、松

江・加茂・郡村・亀嶌・八代・木次・三刀屋・今市・大津・宍道・大東・松寄下・大社・平田・松江と出雲の各地を巡っている。この『桜の首途』に入集する顔ぶれには、たとえば広瀬百蘿の追善集『あきのせみ』（文化二年〈一八〇五〉）に入集する「三刀屋連」の俳人（喜朝、維中、東明、亀六）、手銭有秀の追善集『追善華罌粟』（文政四年〈一八二一〉）に入集する平田の俳人（春声）と共通する俳人がいる。こうしたことから、出雲の俳人の多くは再和派の影響下にあったと推測される。本書に再和派の道統二人がそれぞれ序跋を寄せていること、また徐風庵が序文で「その国に我門の盛んなるは、またく此あるじの徳化にして」（二ウ）と中哉を讃えていることには、以上のような背景がある。

二、編者と刊年

さて、本書は得々庵中哉が不惑の歳（四十歳）を迎えた記念の集で、編者の松声は中哉の子息である。ただし、本書中には年記がなく、刊年は不明である。したがって中哉と松声が何代目の当主にあたるのかも判然としない。しかし、後述するように、中哉は十七代の田部長右衛門興真、松声は十八代の田部長右衛門豊房、そして本書の刊年（十七代が不惑を迎えた年）は文政十年と比定することができる。

すなわち、前掲相良氏稿に載る「田部家歴代当主と戒名（「祥月命日覚書帳」による）」を参照し、中哉あるいは松声に該当する可能性のある歴代の生没年と享年、そして不惑を迎えた年を計算して一覧にすると以下のようになる。

	俗名	生没年	享年	不惑を迎えた年
十三代	長右衛門満雅	元文五年～寛政十年（一七四〇～一七九八）	五十九	安永八年（一七七九）
十四代	長右衛門安興	不明～文化七年（?～一八一〇）	不明	
十五代	長治郎仲通	不明～文化七年（?～一八一〇）	不明	
十六代	穂五郎	不明～文化七年（?～一八一〇）	不明	
十七代	長右衛門興真	天明八年～天保七年（一七八八～一八三六）	四十九	文政十年（一八二七）
十八代	長右衛門豊房	享和三年～文久二年（一八〇三～一八六二）	六十	天保三年（一八四二）
十九代	松太郎倍種	天保九年～安政四年（一八三八～一八五七）	二十	
二十代	周重	天保十三年～明治二十一（一八四二～一八八八）	四十七	明治十四年（一八八一）

いっぽう、『まつのはれ』に序文を寄せた多賀徐風庵は、安永二年（一七七三）生まれで、天保三年（一八三二）に六十歳で没している。これを参考に絞り込むと、十三代が不惑を迎えた安永八年、多賀徐風庵はまだ七歳でなので、十三代は中哉に該当しない。また、十八代が不惑を迎えた天保十三年には、すでに多賀徐風庵は没しているので、十八代もやはり中哉には該当しない。とすると、中哉に該当するのは、

十四代から十八代までに絞り込むことができる。

さらに、出雲市に寄託されている山田家資料をご調査なさった佐々木杏里氏（手錢記念館学芸員）からは、同資料中の俳書『つきのやど』（万延元年〈一八六〇〉序、苔洲天鱗編、雲州仁多郡／桜井氏蔵板、（京都）東洞院仏光寺上／きくや平兵衛（刊））に、松声が入集しているとのご教示を得ることができた。この知見によれば、多賀徐風庵の在世中に『まつのはれ』の編者となり、かつ万延元年に生存していた人物は、十八代のみとなる。つまり、松声は十八代の長右衛門豊房であると推定することができるのである。となれば、得々庵中哉は十七代の長右衛門興真であるということになる。

十七代が不惑を迎えた文政十年、十八代は二十五歳、多賀徐風庵は五十五歳、跋文を寄せた田中五竹庵は五十一歳であった。いずれも『まつのはれ』に関わった年齢として矛盾はない。したがって、繰り返しになるが、『まつのはれ』は十七代の四十賀の記念集として、十八代によって編集され、文政十年に刊行されたと推定することができるのである。

三、十七代、十八代について

なお、前掲の表に示したとおり、歴代当主のうち十四代から十六代の三名は、同じ文化七年に亡くなっている。相良氏稿によれば、それぞれ、正月十三日、八月五日、八月晦日であったという。このことは、田部家にとって、まさに存亡の危機といってよい状況であったと想像される。相良氏稿によれば、十七代は「福庭太郎兵衛正真実男（佐一右エ門が文政十一年ころ長右エ門を襲名）」とあって、他家から田部家に入っていることが判る。また、十八代も「十七代興真養子　□田與兵衛時喜ノ実男」とあって、やはり他家から養子に入っている。文化七年から文政十年までは十七年が経過しており、詳しい事情は判らないながら、多くの苦労を乗り越えて迎えた不惑の歳だったのだろう。本書で「田氏の中興此人なるかな」（一オ）と中哉を讃えている背景には、そうした事情があったのだと理解することができる。

おわりに

以上、本書は出雲の美濃派資料として、また田部家当主の俳諧活動をうかがい知るための資料として重要な撰集である。しかし、国文学研究資料館が公開している「日本古典籍総合目録データベース」には記載がない（令和元年10月31日閲覧）。ここに翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊（縦二二・六cm×横一五・九cm）。
袋綴じ。楮紙。
表紙……香色原表紙。
題簽……原題簽。中央無辺。「まつのはれ　全」と摺る。

見返し…枠線中を界線で区切り、「美濃　五竹庵正／松之曠／出雲　田松聲編」と摺る。

版式……無辺無界。発句のみを載せる部分は毎半葉八行。前書も載せる部分は九行乃至一〇行。

字高……一四．八cm（巻頭発句「峯はまだ～玉水」〈第一丁表四行目〉を計測）。

刊記……「蕉門書林／皇都寺町通二條／橘屋治兵衛梓」。

丁数……全二〇丁。

備考……第一丁裏に挿絵（雲と太陽の図）を載せる。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。異体字等は概ね通行の字体に改め、一部原本の表記を残した。原本の各丁片面の終わりに当たるところに」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。

なお、梅憐発句（十三ウ）には彫り残しがあり、下五が「二二輪」と読めるが、句意を考えて「一二輪」とした。

〈翻刻〉

まつのはれ　全　」（表紙・題簽）

美濃　五竹庵正
松之曠
出雲　田松聲編　」（表紙・見返し）

賀章

不惑の春をむかへられし中哉のぬしをことぶきて
峯はまだ梺のさくら咲にけり　玉水

田氏の中興此人なるかな
分別の花の盛りぞ初しら髪　鵜平　」（オ一）

（挿絵　太陽と雲）　虎嶽［虎岳］（陽刻）　」（ウ一）

［朧月］（刻除）

出雲の国なる得々庵主は、代々豪冨の家に生れながら、心は風雅の洒落に遊びて、社中を勧懲することいとせちなりとぞ。されば、その国に我門の盛んなるは、またく此あるじの徳化にして、ことし不惑の賀齢なる」（オ二）も、猶行すゑのひさしきを寿き述ることにぞありける

月花の遊びに惑ふことあらじ　徐風庵

［徐風庵］（刻除）［文柳］（陽刻）

」（二ウ）

惑はずとは聖賢の上にぞ。予は愚にして何くれかくれと、
たゞよそのよはひの無事をよろこぶのみ

老仲間ながらひるまじ花の欲　得々庵
汲や霞に千代のぶる酔　松声
詩に見ぬ諸越の長閑にて　玉椿
由緒伝はる屏風一双　草露
つら〳〵と待宵の月さしかゝり　蝶菜
お胤やどして冷を気づかふ　たまる
うらみたい文むづかしと打なぐり　交桂
紀伊の浪路のあるゝ此頃　一貫
かつぎ出す市の青物直を持て　其渕
娘に過た智果報なり　一外
糸竹も今外屋敷の桃さくら　其亭
囀る鳥に巣を造る鳥　一歩
すみやかに雨晴上る五つ前　汀柳
操出す陣に軍法の指揮　喜朝
」（三ウ）
疱瘡子わやくもしばしたらされて　白羽
時をあらそふ田植最中　孤雲
弓手右手領地わかれし長堤　虚白
拾ふた金の虚言の取沙汰　其水

田部松声編『まつのはれ』

膳もまだ取れず子待の月冷て　桃酔
とぎれもなしに蟋蟀なく　壺滴
雲の涌く山路の関にとも白髪　松居
箔ひからせて持仏あがめる　兎川
」（四オ）
千金の價かぎらぬ花ざかり　如意庵
齢長閑にことほぎの春　詠帰庵

右短歌行

慈父ことし不惑の齢を重ね、諸君子に金玉の雅章を乞、
冊子に登せて風交の因みを結ばんとぞ。子として其健な
るを悦びざらんや。いさゝか心の端を祝し侍りて」（四ウ）

遊ばれよ老も幾千代太郎月　男　松声

光暗すみやかにして慈父はじめの老とはなり給ひぬ。猶
も幾とせ尽ぬ慈愛を蒙らん事を祝し侍りて

惑なき老ことぶくや親子草　玉椿

我夫なる人のよそぢの賀をことぶくとて

老初の老伴ふて千代の春　たまる
」（五オ）

たらちをのよそぢの賀に

あやからんむつまじ月の年祝ひ　　那美
花色やさめぬ小袖をとし祝ひ　　しけき
明くれめぐみを蒙る君のとしの賀に
芹摘や長き根いはふ老はじめ　　ひさ
竹によそひて祝し奉る
この君はかはらぬ艶ぞ初度の春　　更蚊　」（ウ五）

所縁には父とも敬ひ、風雅には兄ともしたふべき得々庵雅君、ことし不惑の賀にあたり給ふ。いよ〳〵正風の俳諧に遊びて老後をたのしまれんと、此冊子を編るものから、永く不易の造化に導かれんことを寿き祈りて

老そめて花に着る笠あやからん　　草路

○　」（オ六）

田部氏の不惑を祝し侍る

老そめて猶たのもしや松の花　　麻嶺

田部中哉賢士の不惑の春をむかへ給ふと、社友汀柳より聞えければ、いざや祝し申さんと賀人庭前にひめらるゝ

松によせてことぶくことしかり
老の名も若やぐ鬢や松の花　　固有

庭前の愛樹によせて祝し侍る　」（ウ六）

松とともに花さく老や春永き　　其亭

花鳥を懐にし、鉄の山を積んで国に長たる田部中哉雅公の初老を祝して

松に效ふみどりや若き老の艶　　蝶菜

おの〳〵端書ありて

花の姿若葉の種や無尽蔵　　白羽
惑はじな花の苧の道はじめ　　交桂　」（オ七）
千とせふる其若松ぞ老の春　　竜洲
千代のぶるよそぢの老や春永き　　孤雲
幾春もともに遊ばん老仲間　　墨後
百とせの老木の梅や咲はじめ　　撫松
天地のめぐみや花の老はじめ　　松居
老そめし梅のちからや玉の春　　朝柳
惑なき道のあゆみも春日かな　　其渕
春若し智恵の袋の老おもき　　一貫　」（ウ七）
はつ老のとしはものかは松の花　　其水

田部得々庵雅君は累代福録（ママ）に長じ給ひ、皆人のうらやま

ざるはなし。中にもめでたきは、後園に栄ふる一樹ありて、とし立かへる春のはじめは、今一しほの色増りけり、とむかし人の詠しところを詠め、あるは散うせぬ落葉をひろひつ、茶にはさびしき時雨のゆふべ、俳諧にはをかしき雪のあけぼの、四時の」（オ八）友にも乏しからず。竹をこの君と賞し、梅をこの花の薫らんよりもいと心高し。ことし不惑の春をむかへ給ひ、常葉の色のいつまでか、主は此樹を賞翫し、樹はあるじをしたふらむと、木蔭に並居て千代八千代と寿きうたひ奉る

老の名や松と伴ふ今としより　　桃酔

家は数代の余慶に栄え、徳は」（ウ八）多年の功あらはれ、此国に一人の長者たる田部得々庵大人、ことし初老の寿にあたらせ給ふ。されや、両翼には松声、玉椿の二君子あり。家務の補佐は兔川子にまかせ、常に正風滑稽のをかしみに遊びて、ます〳〵修身斉家の心あがらんことを祝し奉る

惑ひなき智恵の花咲あるじ哉　　汀柳

松のよはひによそへて、初老の賀を」（オ九）祝し奉るは得々庵のあるじの君にこそ

花さくや松も千とせの老はじめ　　喜朝

寿福は世に欲する所ながら、両全を得がたし。爰に田部大人は家ます〳〵富、寿も又不惑の春をむかへ給ふ。上なきよろこびを賀し奉りて

惑なふ幾千代咲む福寿草　　一外

積善の余慶ある田部大人の不惑を祝し奉りて」（ウ九）

積つ蒔つふへる初老の徳の種　　壺滴

田部得々庵英君は、累世国の財用を捧げ、猶はた礼を厚ふして、かたく厳制を守り給ふこと、聴に達し、重き褒賞を蒙り、下にはひろく愛憐を促給ひ、上下一致の誉ありて、幸ひ自らめぐり、ことし不惑の春を迎へ給ふにぞ。いよ〳〵南山の寿を祈り奉るばかりなん

道いよ〳〵堅き老や春の曠　　一歩」（オ十）

一字千金の恩沢は蒼海にもたとへがたき田部得々庵大人の不惑を祝し奉りて

百千代の春待つ初度の齢哉　　虚白

得々庵主君は、累代家務の業広ふして、手の代、里のよぼろなど、あまた召仕はれ、やつがれも其数に加はり、恩恵の厚きを感仰し奉りぬ。時に此春不惑のよはひにあたらせ給ふ。猶」（ウ十）万歳を賀し奉る

月花の道幾千代や老はじめ　　兎川

山は雲備石につらなり、十有余里が間引廻す屏風のごとく、撫盲する人数千員、万石の米穀を倉稟に積てやしなひはごくむ得々庵のあるじ、ことし不惑のはるを迎ふ。家富み業とこしなへにさかえて、実に郡縣の長、大廈中奥の人にて誰れ人か仰がざらん、尊まざらむ　」（オ十一）

今の代の大物主や家ざくら　　元朝

席上探題

淡雪や見る〳〵雨に降かはり　　カモ詠烟庵　朝嶺
菜の花の中や小道の又径　　ミトヤ　交桂
うぐひすや日は二三尺山放れ　　、　喜朝
地につかぬまではあやあり春の雪　　、　白羽
青麦や草の庵の見きり垣　　、　松居　」（ウ十一）
かゝる子はもたでいとなむ蚕飼哉　　ア井　草路
松原に行駒はやし春の風　　、　一外

野遊にしばらく牛を詠めけり　　カメタケ如意庵　固有
野つゞきもまだ下京や若菜摘　　、　桃酔
京を出て野梅に廻る径かな　　、　汀柳
鳴捨る野ずゑは広し雉子のこゑ　　、　孤雲
鉢植の凍解見るや坪の内　　、　壺滴
野遊の戻りは草の袂かな　　ヨシダ　其亭　」（オ十二）
遠駅の馬も霞の野中かな　　、　蝶菜
梅かほる隣もありて薄月夜　　、　其渕
退いて松に吹るゝ汐干哉　　、　一貫
乙鳥や軒にもなれず二羽一羽　　、少年　一省
日の柳雫するまで詠めけり　　、　一歩
春寒しまだ白魚の目に足らず　　、　虚白
雨の後霞ひと重の野面かな　　、　其水
しほ風に青麦肥る二月哉　　、　兎川　」（ウ十二）
やはらぎを花に見せたる山葵かな　　、女　ひさ
まつ花の事は思はで柳かな　　、、　しけき
花の夢さする柳のあした哉　　、、　那美
木々の芽のふくるゝ春の雨夜哉　　、、　たまる
泥足の女あはれや田にし売　　、　松声
桃咲や生壁かはく日の匂ひ　　、　玉椿
行あたる花に暮けり雨の蝶　　得々庵　中哉　」（オ十三）

四季名録

旭の鶴のひとこゑ高しはつ霞　武門　玉水

春眠の時気五更の旭光もしらず、三畳の香庵に枕を高ふして

鶯にまうしわけなき朝寐かな　鵜平

○

あの雲はどちへ通ふぞ秋のくれ　マキ　東保

春もまだかぞへる梅や一二輪　ア井　梅憐　」（十三ウ）

雨はれに燃たつ色や桃の花　、　井居

虫の音の昼も淋しき野末哉　、　子東

梅の香や鶴遊ぶ野の方何里　カハチ　為笑

川の瀬の高ふ聞ゆる霜夜哉　フセ　汀雨

長閑さや飼鶴馴る下屋鋪　マハセ　藍水

雨はれの気しきを山のわらひけり　、　樹瓢

礒聞舟の一夜や淀竹田　カメタケ　纓川

秋たつや茶園に見ゆる風の色　、　昶　」（十四オ）

世に媚ぬこそをかしけれ鶏頭花　、　幽雅

梅ちつて柳にすゝむ春の色　、　花亭

熊笹の雫こぼすや雉子のこゑ　、　島砂

月に照る紅葉の奥や鹿の声　、　逸性

大竹にしづくあふれて春の雪　、　玉峯

月かたぐ遠山もとや鹿のこゑ　、　十歩

夏の月あるじにはれて昇りけり　、　松人

葉柳もともに青田の嵐かな　、　琴留　」（十四ウ）

山もとや雪間の水にあさる雉子　、　得之

踊子の拍子を余所へとられけり　、　素蘭

鐘の音にこぼるゝ露の夜明哉　、　文郁

蝶々の見すてかねけり軒の花　、女　しほ

春もまだだゞ青柳の在所かな　、　式之

朝日二歩川霧ふかし崩れ簗　ヒタ　虎渓

草を出て流れをてらす蛍かな　、　士鉉

通りだけ明たる橋の涼みかな　、　露井　」（十五オ）

うぐひすや枝かへ〳〵に鳴て飛び　、　圭里

三日から柳の糸の月夜かな　、　春川

二日灸して夢も見ず寐たり鳧　、　楚青

絵むしろに笠も散たす花見哉　、　池柳

花びらに旭をいだく牡丹かな　、　虎洲

松の葉の落て立けり苔の花　、　梅伍

ひと家内尻のならぶや大根引　ヨコタ　芦洲

しら雲の中に夜明の桜かな　、　朝四　」（十五ウ）

浮草の見さだめがたき暑さ哉　、　二英

朝顔や花の藍蠟に染る露　、裏遊
汐浜にあられふる夜の千鳥哉　、亀笑
しら魚のいよ〳〵白し瑠璃の鉢　、撫松
すゞしみを包む桔梗の莟かな　、枕歯
みそさゞゐ鳴や味噌する夕間ぐれ　、一瓢
雨雲に月はかくれてほとゝぎす　、松下
押放す湖の真中や几巾　、其瓢
」（十六オ）
霞む野や鶴を見に行人の声　、簸龍
五羽三羽寐に行鳥や夕がすみ　、古仙
昼は水に戻りて月に氷る池　、寿松（マキ）
誉てとく嫁の手際の粽かな　、義酔
雲退て笑ふも早し里の山　、寿山（クノ）
のどかさや長が搆の鶏何羽　、素雄（カモ）
蜘の囲に麦糠かゝる暑かな　、直郷（ミトヤ）
黄鳥に嘘こらゆる庵主かな　、竜洲
」（十六ウ）
橋立のはてはいづこぞうす霞　、墨後
浪低き磯辺の松やひとかすみ　、更蚊
埋火の白炭になりけり小夜時雨　、松笠
哺を夏す神の烏や若葉山　、女とも
乙鳥の遊びや浪の花の中　、寄竹
江に満る水もうごかぬ二月かな　、元朝（マツヱ）

かり智恵におさまる御代や猿廻し　、春水
ふまれてもかまはぬ顔や春の草　、桃花園
」（十七オ）

諸国文通

中垣にこゑはしのばず猫の恋　、青峨（ミノ）
気をとめて聞程さびし虫の声　、素元
平らかな沖に文あり春の風　、専里
花の山大宮人とまじりけり　、巨雪
網人のはるかに動く霞かな　、志方
しまきせし松の風情や雪の朝　、里蝶
白雨やおほ竹原のいかめしき　、李報（ママ）
」（十七ウ）
棹さしつ流して見たり納涼舟　、樵宇
蔦かづら秋を柵む枯木かな　、梅似
涼かぜや人一所へよせて行　、得之
春の宵や雨にうるをゝはなしあり　、西甫
梅ちるや軒から薫る花の雪　、甫三
一二里の山家歩行や梅のかぜ　、松軒（越前）
汐の外けふも波なし帰り花　、素由
草多き中にたつ名や女郎花　、拍子
」（十八オ）
行秋や水にゆるがぬ松の影　、芝薫（ママ）
際もなき湖水の上やおぼろ月　、止動

山寺の犬人に馴てちる桜　、　里溟
朝の間やこゑも角ある氷売　、　木斎
寐つ起つ果は夜長の朝寐哉　周防　其山坊
鷹啼て秋風見ゆる梢かな　、　竹隠
風に鳴朝鷹岩をつかみけり　長門　泰二
三日月もくゞる水あり薄原　、　可澄
正月も月夜となりて人通り　、　雨江
子規紙燭の及ぶ空でなし　土左　五雲
硝石とる人に追はれて竈馬哉　、　竹人
雲のはやしちれば誠の桜かな　、　兀山
常よりも汐干にはやき鳴戸哉　、　理石
山里やみねものこらず春の行　江州　居静
ふじの雪きゆるや白き雲重ね　、　如童
うつり行秋や鳴たつ細ながれ　伊勢　斯士
松むらに家ありとしる蚊遣かな　、　白己
ちる花の中に文ある胡蝶哉　石見　雲梯
水青し高根〳〵の雪のかげ　、　廬仙
聞しめて野がはは夢の水鶏かな　洛陽　不由
長閑さやながれ行水遊ぶ水　、　可友
山吹やされど流れず渉し船　女　山花
花守りて花見ぬ人も浮世かな　、　いはほ
」（十八ウ）

ひとり見る程は秋あり庵の草　嘘吹　」（十九ウ）

［仁人之安宇］（刻陰）
得々庵主人のよそぢの賀を祝して
まどはざる齢かほりて莟む花　五竹庵
［五竹庵］（刻陽）［子琴之印］（刻陰）」（二十オ）

蕉門書林　皇都寺町通二條　橘屋治兵衛梓　」（二十ウ）

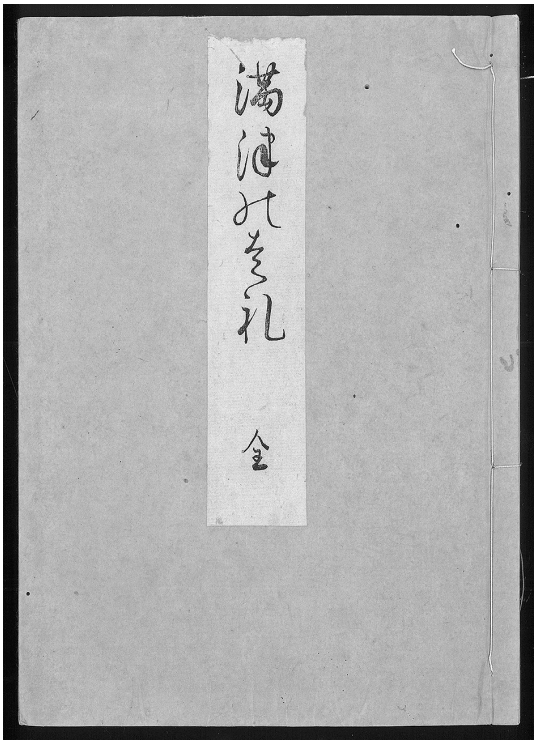
（白紙）　」（裏表紙見返し）

〈付記〉

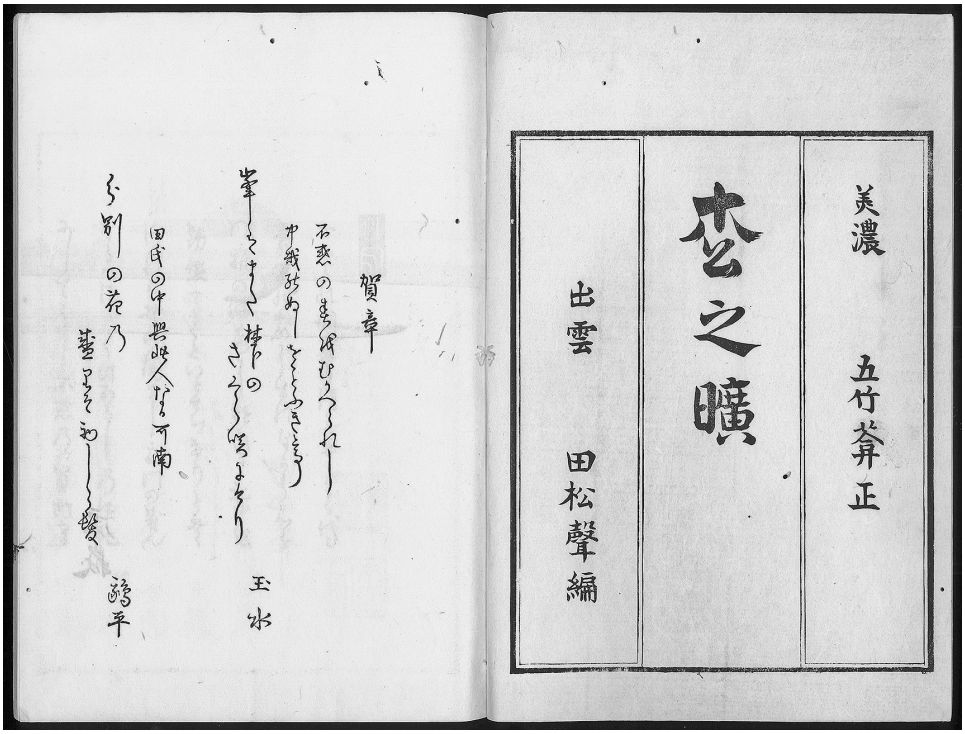
本稿をなすにあたり、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二一年度、代表・野本瑠美）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「化政期俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号 18K00296 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

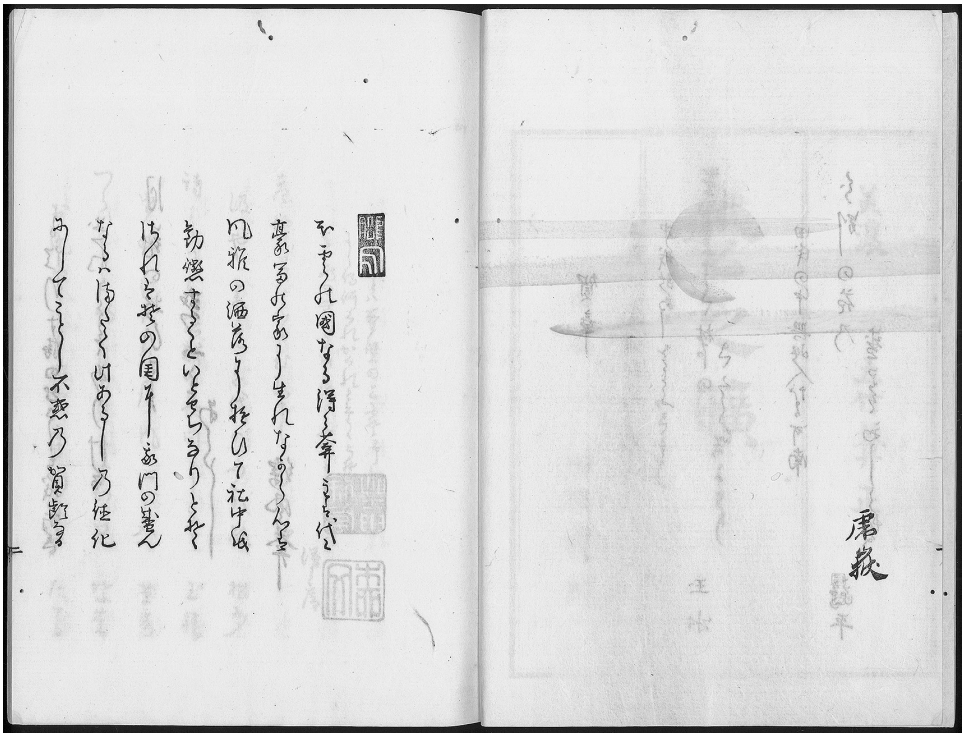
1. 表紙



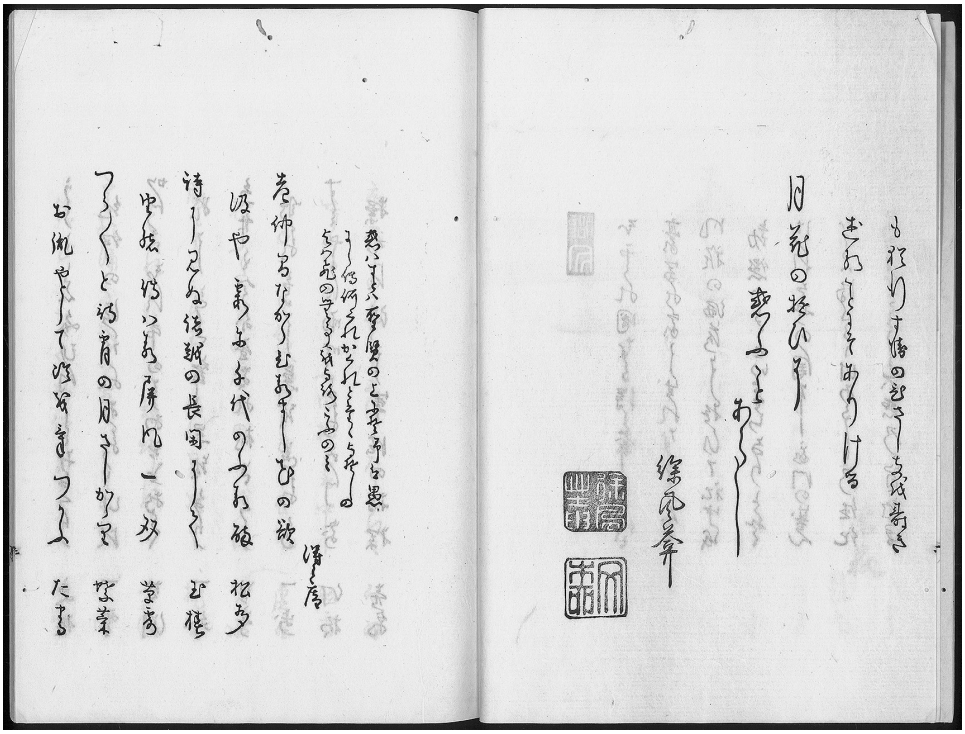
2. 見返し・巻頭（一オ）



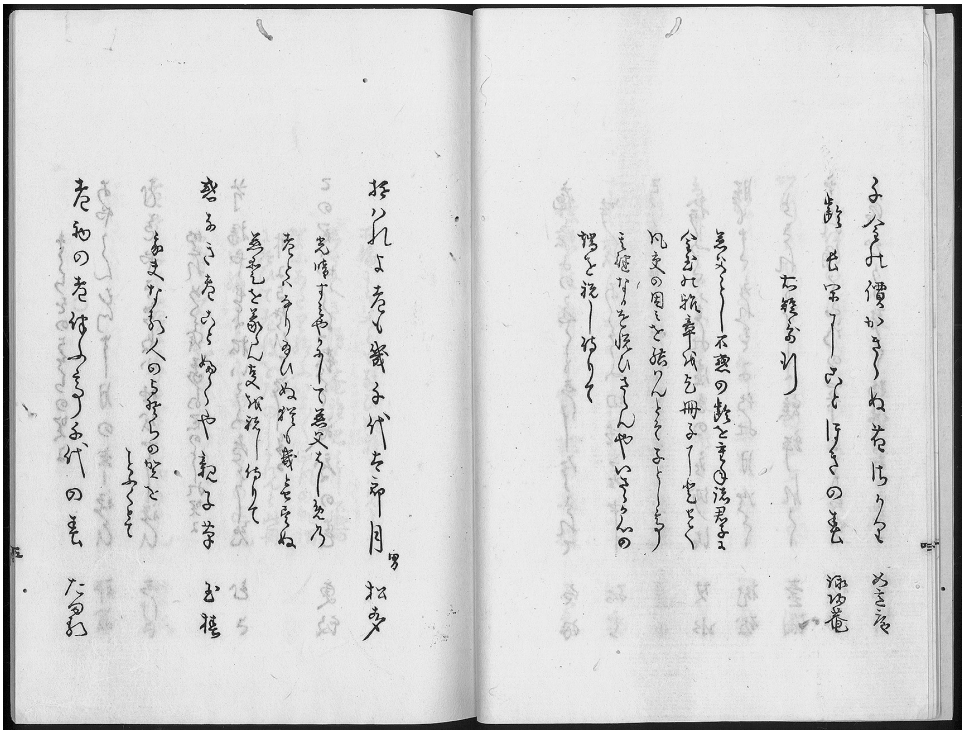
3. 挿絵（一ウ）・序冒頭（二オ）



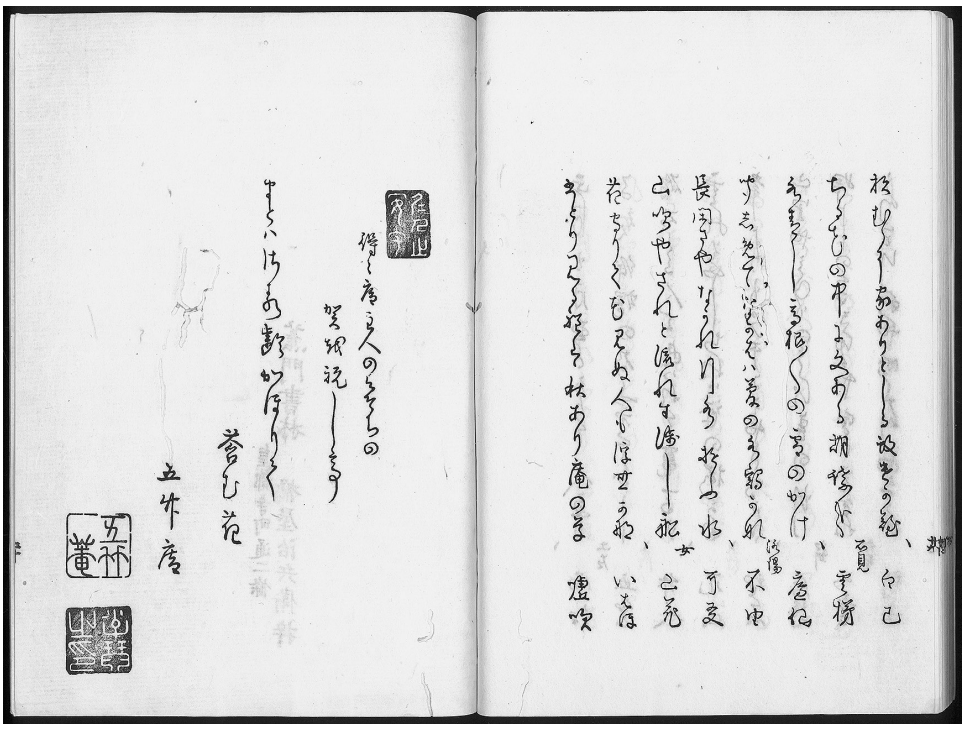
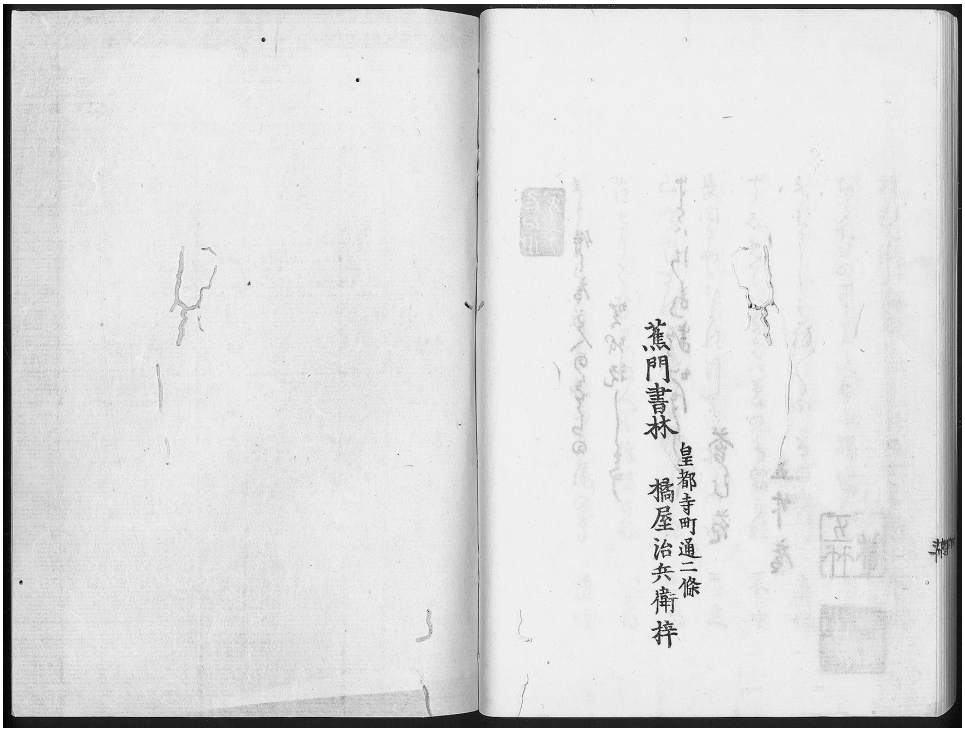
4. 序末（二ウ）・本文（三オ）



5. 本文（四ウ・（五オ）



6. 本文末（十九ウ）・跋（二十オ）



7．刊記（二十ウ）・裏表紙見返し